詩

星野哲郎（ほしのてつろう）

周防大島町

（1925～2010）

提供・星野哲郎音楽事務所 有限会社 紙の舟

【著作】
「三百六十五歩のマーチ」（唄：水前寺清子）（昭和43）
「風雪ながれ旅」（唄：北島三郎）（昭和55）
「みだれ髪」（唄：美空ひばり）（昭和62）　ほか

【閲覧情報】
星野哲郎記念館（大島郡周防大島町）にて作詞活動に関する資料を展示
星野哲郎公式ウェブサイト「いろはにそらしど」において詳細な作詞年譜が閲覧可能

星野哲郎（本名・有近哲郎）は、大正十四年（一九二五）、周防大島に生まれる。戦後の日本歌謡界を代表する作詞家の一人であり、手掛けた作品数は約三千曲に及ぶ。数々のヒット曲を生み出したが、「三百六十五歩のマーチ」に象徴される「人生の応援歌」をライフワークとして追求した。

昭和二十一年（一九四六）、船乗りに憧れて進んだ高等商船学校（現・東京海洋大学）を卒業。日魯漁業下関支社に漁船の機関士として就職するが、二年後に腎臓結核を患い下船する。右の腎臓を摘出する手術を受けた後、故郷で四年に及ぶ闘病生活を送る。当初は寝たきりの苦難の日々であったが、周囲の愛情に抱かれて心身の傷は癒えていった。「人生の応援歌」は、この闘病の体験を原点にしている。

闘病生活中は文芸誌に投稿しつつ活路を求めた。昭和二十七年（一九五二）、雑誌『平凡』誌上における日本コロムビア主催の歌謡詞コンクールの入選を契機にして作詞家の石本美由起の知遇を得る。以後は石本が主宰した歌謡同人誌『新歌謡界』を拠点として歌謡詞の創作に励む。詞の冒頭の二行に作品の生命を刻む作詞法は、この投稿作家の時代に培われた。

昭和三十二年（一九五七）、横浜開港百周年を記念して公募された「横浜の歌」で一、二位を独占する快挙を達成する。コンクールの選者であった作曲家船村徹の熱心な勧めにより上京し、翌三十三年（一九五八）に日本コロムビアの専属作詞家となる。以後、一日一作を日課とし、巷に「生きた言葉」を拾いながら自身の作風を広げた。

昭和六十三年（一九八八）、第一回「全日本えん歌蚤の市」を故郷の周防大島で主宰。これは地元のボランティアによって運営されたチャリティーコンサートであり、平成十五年（二〇〇三）の同地における最終回まで日本各地で計十三回開催された。

平成十九年（二〇〇七）、周防大島町に星野哲郎記念館がオープン。翌年、故郷への感謝の意を表して「星野哲郎スカラシップ」が創設された。実施された十年間に返済義務のない奨学金が計五十人の子供たちに授与された。

星野は海を題材とした作詞家としてもよく知られた。大成した後にも「僕は船乗りで終わりたかった」と回顧し、断ちがたい思いを数々の潮歌に託した。

平成二十二年（二〇一〇）逝去。出棺の際には自作の「男はつらいよ」が会場に流された。

（文・木下尊行）

思いついた歌詞やタイトルを書きとめた
コースター類。多くの作品がここから生まれた。

周防大島町筏八幡宮前にある「なみだ船」の歌碑。
碑文は星野と船村徹による自筆。